

里川景観の特性把握とその意味
—里川集落の空間的構造及び人と河川との関わり方— その7—

正会員○中西 章敦^{*1} 准会員 江頭 正成^{*2} 同 坂田 有香^{*2} 正会員 岩田 和哉^{*3}
同 姫野 由香^{*4} 同 小林 祐司^{*5} 同 佐藤 誠治^{*6}

7,都市計画-99.その他
里川集落 河川環境 空間的構造 景観

1. はじめに

1-1. 前稿までに対する本稿の位置づけ

前稿までは、里川集落の特徴の把握とその分類手法の確立、分類された集落ごとのアンケート、ヒアリング調査とその解析を行ってきた。

前稿で行ったアンケート調査およびヒアリング調査の結果では、調査を行った全ての集落において、里川集落特有の景観の性質があると予測し、本稿ではアンケート調査の結果をもとに、ヒアリング調査を重ね、その特性を明らかにする。

1-2. 研究対象集落と語句の定義

本稿での対象集落は、前稿でアンケートおよびヒアリング調査を行った大野川水系中流域に位置する豊後大野市犬飼町柴北上、黒松東、黒松西の3集落に、上流域に位置する竹田市長小野を加えた4集落とする。竹田市長小野を加えたのは、集落が存在する市町村ごとの景観の偏りや、地形的条件に左右されることを防ぐためである。なお、前々稿のクラスター分析によれば、黒松東、黒松西、長小野は河川へのアクセス性が高く自然度の高いクラスター1に、柴北上はアクセス性が低く、自然度の高いクラスター3に属する。集落ごとの特徴をまとめたものを表1に示す。

アンケートおよびヒアリング調査において、住民が考えるお気に入りの風景を里川集落特有の景観としてとらえ、里川景観と定義する。

表1 各集落の特徴

集落名	流域内での位置	市町村名	クラスター	特徴
柴北川	中流域	豊後大野市犬飼町	クラスター3	アクセス性:低 多様性:高
黒松東			クラスター1	アクセス性:高 多様性:高
黒松西				
長小野	上流域	竹田市		

2. アンケート調査・ヒアリング調査について

お気に入りの風景の有無とその場所、現在と過去のどちらにお気に入りの風景があるかを問う。現在のお気に入りの風景については、現地調査の写真からその特徴のとりまとめをおこなう。過去のお気に入りの風景についてはヒアリング調査をもとに、現在と変わらない風景なのか、変化した場合はその点を取りまとめることとする。

2-1. アンケート調査

アンケート調査結果を表2に示す。柴北上では現在より過去の方がやや下回るものの、他集落では過去の方が約40%上回る回答となり、現在に比べて過去の方がお気に入りの風景があったことがわかる。これは過去あった風景が、現在には喪失または変化していることを示す。回答におけるお気に入りの風景のうち、最も多かったものの位置を中流3集落については前稿の図2、図3、図4に、上流長小野については本稿の図1に示す。その景観写真を図1、図2、図3、図4に示す。いずれも集落内の他区間に比べて河床の雑草が少なく水面幅が広い。また、河畔林が茂っていない、または低木なため、川と集落を同時に見渡すことが可能な場所である。川沿いには田畑としての利用が見られ、その背後に生活道路があり、田畑と河川を見下ろす一段高い位置に集落が川を向いて存在する。

位置的にはお気に入りの風景は単独では存在せず、周囲には川遊びを行う箇所や散歩を行う区間が存在し、生活の場面の中での景観であることが考えられる。

表2 アンケート調査結果

		柴北上	黒松東	黒松西	長小野
お気に入りの風景がある	(現在)	8	7	15	17
	(過去)	7	10	21	18

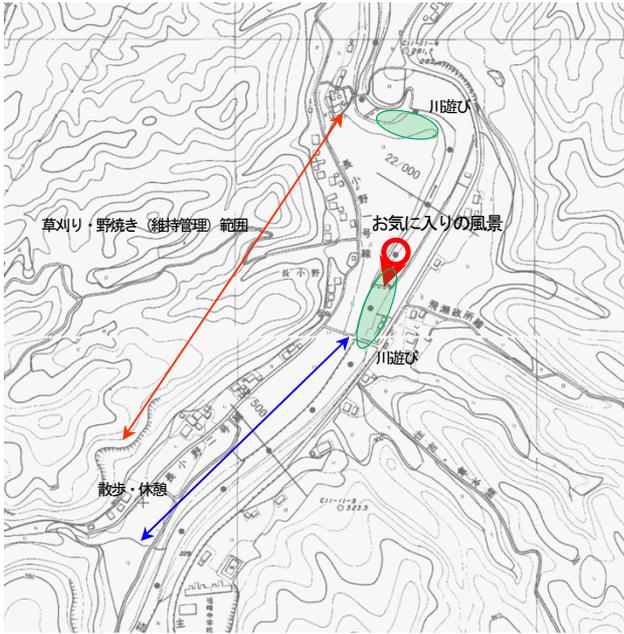


図1 長小野平面図



図2 柴北上現景観



図3 黒松東現景観



図4 黒松西現景観



図5 長小野現景観

2-2. ヒアリング調査

2-1 のアンケート調査の回答より、過去に存在したお気に入りの風景が現在では喪失されていることについて、その理由や変化した点についてヒアリング調査を行った。集落ごとで内容に差異はなく、主に以下の①～⑥の回答であった。

- ① ほ場整備により田面が高くなり、道路や家屋から河川が見えなくなってしまった。
- ② 川沿いの田畑の土地利用が改変され、家屋が建ったため、川が見えなくなってしまった。
- ③ 河畔林が高くなり河川が見えなくなってしまった。
- ④ 河川改修により護岸がコンクリートで覆われてしまった。
- ⑤ 大きな道路が河川と集落を分断して川を意識して見ることがなくなってしまった。
- ⑥ 過去に遊んでいた瀬や淵が洪水で砂や石で埋まってしまい、なくなってしまった。

3. 里川景観の特徴把握

現存するお気に入りの風景についても、その影響は小さいながらも過去からの変化を受けていることがわかる。ここで、現在のお気に入りの風景について、ヒアリングをもとにこれら変化の影響を受ける前の景観を作成し、里川景観の特徴を把握する。

3-1. 里川景観の作成

アンケート調査のお気に入りの風景に、ヒアリング調査の結果を反映させ、特徴的な里川景観を作成する。里川集落として河川と住民の関わりが強いとしたクラスター1の景観が里川景観としての特徴が高いと考え、代表して長小野地区を対象とする。お気に入りの風景に2-2の①～⑥を反映させ加工したものを図6に示す。現在の護岸勾配がコンクリート構造で勾配1:0.5であるのに対し、自然斜面構造で勾配1:2.0と緩勾配にし、これにあわせて田面を低くして水面が集落から見えるようにした。瀬と淵についても1ヶ所ずつ追加した。河畔林については現在も高くないが、より高さを抑えたものとした。

3-2. 里川景観の特徴

前項で作成した里川景観を、長小野地区住民に提示しこれに対してのヒアリングを行ったところ、過去の景観に近いものであり、より里川景観らしいと感じるとの回答を受けた。このことから、里川景観の構造の特徴として、以下の①～⑧が挙げられる。

- ① 河川から背後地は、田、道路、家屋と順に敷高が高くなり、集落から水面を見ることが可能である。
- ② 水面と集落を同時に見ることが可能である。
- ③ 河川の草刈等が行われ河畔林が生い茂っていない。
- ④ 家屋が河川に向いて建っており、河川に背を向けた家屋がない。

- ⑤ 人と河川との関与が見られる。(石橋、水路 etc.)
- ⑥ 護岸構造がコンクリート構造ではなく、自然斜面構造となっている。
- ⑦ 護岸勾配は1:1.0～1:2.0程度の緩勾配である。
- ⑧ 当該区間で何らかの河川の利用が行われている。(川遊び、魚とり etc.)

4. 総括

里川景観においては、その自然環境としての空間の美しさだけでなく、そこに人と河川との交渉が行われていることが特徴である。

経年的な変化により喪失した点は、集落から川が見えなくなる変化、川へのアクセス性が低下した変化、河川の利用の減少である。コンクリート構造の急勾配護岸や、放置され高木となった河畔林は、河川の草刈り等の人の手が入っていない印象を受けるばかりではなく、集落と河川とを視覚的にも遮り、人と河川との心理的距離を遠ざける結果となっている。また、同様な構造では河道内へのアクセスは困難であり、階段や斜路等の決まった箇所からしかアクセスすることができなくなっている。こうしたアクセス性の低下は、河川の利用や維持管理の機会を低下させる原因である。

瀬や淵は河川との交渉の場として多様な空間を創出するが、こうした場の喪失は人と河川との交渉の場の喪失につながっている。

里川集落内において、経年的な変化を特に受けたと考えられる区間の例を図7に示す。集落と対岸の田は、ほ場整備により敷高が上げられている。河道内は河川改修によりコンクリート護岸が1:0.5の急勾配で整備されているためアクセスすることができず、維持管理もなされておらず、集落と河川との物理的距離に加え

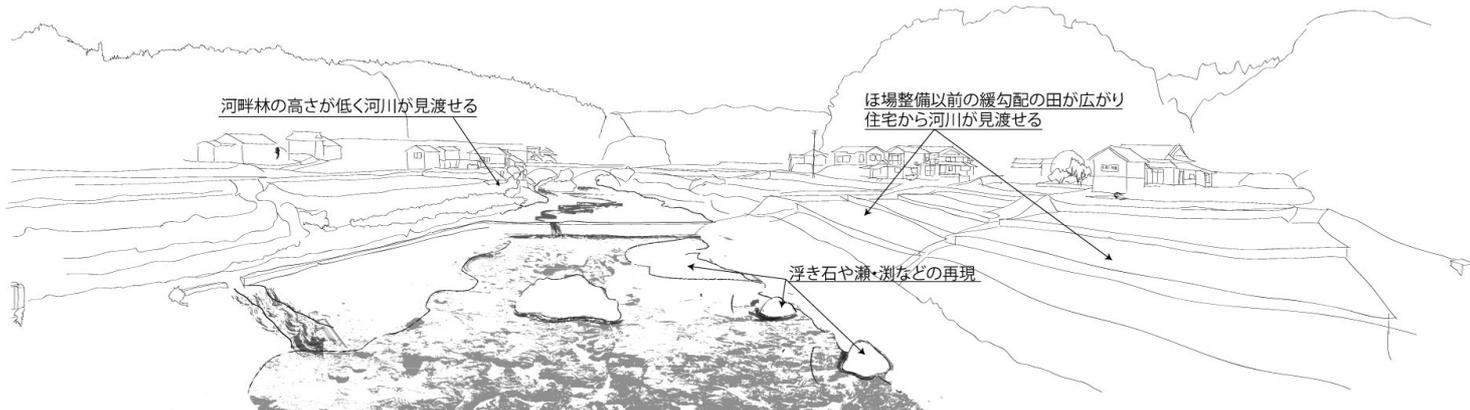


図-6 長小野里川景観(加工後)



図7 経年的な変化の例

心理的距離も遠ざかっている。

心象風景である里川景観は、住民と河川との交渉や河川の維持管理といった人の手が加わることで維持されてきた。これはアンケート調査結果の中で、お気に入りの風景が河川との交渉が多く行われている区間の付近に存在することからも考えられる。過去に比べて現在の方がお気に入りの風景が減ったことは、現在の方が過去よりも河川との交渉が減少し、河川の草刈りや清掃といった維持管理について行われなくなったことも要因である。このことは前稿のアンケート調査の河川管理についての項目の回答からも考察できる。

人と河川との交渉が見て取れ、人の手により維持されている里川景観は、図8のような人の手の入っていない生い茂った河畔林や一様に深い水面等に見られる自然河川景観とは異なるものであり、人の手が入った二次的自然景観である。



図8 自然河川景観

クラスターごとの差異については、クラスター1と3で特徴の差は見られなかった。アクセス性が低いと分類したクラスター3の集落においても、里川景観が現れる区間は、そのほかの区間に比べて護岸勾配が緩勾配で高さも低く、川岸から河道内へのアクセスが可能となっている。このことから、クラスター1と3で、現在の河川へのアクセス性に差はあるものの、かつては同様にアクセス性が高かったのではないかと考えられる。クラスター3の集落は、災害防止のための河川改修や生産性向上のためのほ場整備といった公共事業により、アクセス性の低下や里川景観の喪失といった変化を多く受けていることがわかる。このことから、同様にクラスター2と4においても過去の里川景観は前述の特徴を持った里川景観であることが予測される。

5. 今後の課題

今回の研究では、分類された里川集落のうちクラスター1, 3に属するものだけを対象としたが、その他のクラスター2, 4に属する集落でも同様の調査を行い、里川集落分類ごとの差異の有無を確認することが今後の課題となる。クラスター2, 4では、河川の規模が大きいため、景観に占める河川の割合が大きくなり、河道内の変化についての影響が大きくなることが考えられる。景観を大きく左右する地形的要素について、今回対象とした集落がすべて中上流域であったため、上流、中流、下流と地形的要素が異なる場合での比較についても同様な結果が得られるかを確認すべきである。

河川改修やほ場整備といった事業によって里川景観が喪失してきたと考えられるが、時代の流れの中で、これら事業についての必要性も高く、里川景観を保全した形での事業手法の考案も課題となる。

*本研究は、(財)河川環境管理財団の河川整備基金助成事業によって実施しました。

【参考文献】

- 1)古庄香織, 御手洗朋代, 岩田和哉, 中西章敦, 佐藤誠治, 小林祐司, 姫野由香: 里川集落の空間的構造及び人と河川との関わり方 その1, 日本建築学会九州支部研究報告, 2012年3月第51・3号計画系 pp385-388
- 2)御手洗朋代, 古庄香織, 岩田和哉, 中西章敦, 佐藤誠治, 小林祐司, 姫野由香: 里川集落の空間的構造及び人と河川との関わり方 その2, 日本建築学会九州支部研究報告, 2012年3月第51・3号計画系 pp389-392

*1 大分大学大学院工学研究科博士後期課程

*2 大分大学工学部福祉環境工学科 学部生

*3 大分大学大学院工学研究科博士前期課程

*4 大分大学工学部福祉環境工学科・助教 博士(工学)

*5 大分大学工学部福祉環境工学科・准教授 博士(工学)

*6 大分大学工学部福祉環境工学科・教授 工学博士

*1 Graduate student Doctor's Course, Oita Univ

*2 Undergraduate Student, Oita Univ.

*3 Graduate Student, Oita Univ..

*4 Research Associate, Dept. of Architecture, Faculty of Eng, Oita Univ., Dr.Eng

*5 Associate Professor, Dept. of Architecture, Faculty of Eng, Oita Univ., Dr.Eng

*6 Professor, Dept. of Architecture, Faculty of Eng, Oita Univ., Dr.Eng